

鎮魂の灯籠 広がる輪

福島出身の女性ら発案

2人は同県北部の伊達市出身の幼なじみ。共に実家などの被害は「小さかった」というが、故郷・福島の惨状に心を痛めていた。特に気になったのが、同市の東にあり、海に面した相馬市。何度も海水浴や潮干狩りを楽しんだ思い出の場所でもあった。

大震災や原発事故の影響に苦しむ福島県で生まれ育った女性が、鎮魂の灯籠作りの輪を広げている。練馬区の伊藤朗子さん(50)と川崎市多摩区の小倉美奈子さん(50)。灯籠は福島県相馬市で10日に開かれる犠牲者追悼行事で飾られる。

馬市を訪れ、津波で壊れた建物広がる風景に言葉が失った。「自分にできることを、もっとやらなければ」と感じた。小倉さんは世田谷区や川崎市の高齢者施設で手芸を教えるボランティアに携わる。「みんなの手芸で装飾した灯籠を作って犠牲者を弔いたい」と小倉さんは考え、相馬市と連絡を取った。

た。10日に同市やデザイナ―山本寛斎さんが主催し、夜空に紙風船を飛ばす追悼行事「天灯」の会場で飾ることになった。

手芸は、小倉さんが考案した「メタリックデコレーション」という方法を用いた。花などの絵が描かれた紙に両面テープを貼り、メタリックヤーンと呼ばれる色華やかな太い糸を飾りつけるもので、編み棒を使わず手軽に取り組める。施設で高齢者と共に作った。

この取り組みに協力したのが伊藤さん。6月下旬、夫で作曲家の康英さんが福島市で慈善コンサートを開いた時、偶然、小倉さんと二十数年ぶりに再会した。力になりたいと思い、灯籠の作り方を教わった。

伊藤さんの息子や娘、友人たちも協力。「被災地でボランティア活動をしたくても、子供や、子を持つ親は行動に移すのが現実的に難しい。そんな人たちの思いが灯籠に込められています」と伊藤さんは話す。

灯籠作りには約200人が参加し、約300個が完成。震災で亡くなった相馬市民454人(8月30日現在)の数をめざして作業を続けている。(中川文如)

10日に行事 454個作成中、相馬で追悼



① 灯籠作りに取り組む小倉美奈子さん(左)と伊藤朗子さん(右) ② 世田谷区給田3丁目 ③ 手づくりの灯籠 ④ 小倉さん提供

